

# 金賢娥著（安田敏朗訳） 『戦争の記憶 記憶の戦争 韓国人のベトナム戦争』

三元社、2009年（原著2002年）

1965年から1973年までに韓国は延べ30万人以上の戦闘部隊をベトナムに派遣し、5000人以上の死者を出した（本書52ページ）。この時の韓国軍のベトナム人虐殺については、日本ではほぼ同時代に知られていた。しかし、韓国の公式の歴史ではベトナム参戦は「反共聖戦」、「自由の十字軍」の「武勇伝」であって、「もうひとつの記憶」（第2章）としての加害の事実は忘却されてきた。本書は、著者と市民団体「ナワウリ」（私と私たち）が1999年から2001年にかけて、ベトナム戦争における韓国軍の民間人虐殺を調査した記録である。

著者は、障害者と非障害者、移住労働者と土地の人、女性と男性、社会主義者と資本主義者、南と北などの「境界をなくすこと」を動機として「ナワウリ」を1998年に友人たちと作った時、「ベトナムに行くことになるとは考えたこともなかった」（33、38ページ）。その著者がベトナム調査を始めたのは、日本のピースボートに韓国の市民団体が乗船し、ベトナムのダナンで韓国軍による民間人虐殺の証言に直面したことが契機であった。このような話を聞いたことがなかった30歳代前半のりびとにとって、「両足を切断された被害者が話す民間人虐殺の話は当惑するものであった」（41-43ページ）。この当惑を抱きながら、著者たちはその後3年間の調査を通して、韓国軍ベトナム民間人虐殺の証言を韓国社会に伝え、その意味と格闘することになる。

本書全11章のうち主に2章から7章にかけて、ベトナム調査での多くの被害証言が生々しく語られる。著者はまた、証言に向き合った時の自らの反応を次のように吐露する。「最初に民間人虐殺問題調査で現地に行ったとき、私はそれでも信じなかった。信じるにはあまりに残酷な話が多すぎるのだ」（88ページ）。沸き起こる疑問について著者は「尋ねまくった」のだが、「ある日ふと、なんと暴力的な質問をしているのかと気付いた」

という。「韓国軍の民間人虐殺」と自分の口でいうのに、長い時間がかかった」（89ページ）のは、著者固有の体験にとどまらず、1990年代末の韓国社会におけるベトナム戦争の想起のありようを体現している。また、本書8章では元韓国軍参戦軍人の証言が紹介され、反共国家の公式の歴史、戦争に動員された個の被害と苦悩、侵略され殺される側のベトナム人の証言などが交錯する歴史の断面が浮き彫りにされる。

ところで、韓国NGOのベトナム調査が始まった1990年代末に「30歳代前半」ということは、80年光州事件後の民主化運動の学生世代にあたる。「80年代は単なる数字が示す時代ではなく、特定の歌、単語、事象から、同じ記憶と映像を思い起こすのである」（203ページ）。この場合の「映像と記憶」は、光州事件、歴史教科書問題、新冷戦、反米運動などさまざまであろう。著者が本書の随所で元軍隊慰安婦問題と対照させながら（たとえば、296-297ページ）、韓国のベトナム戦争の「もうひとつの記憶」を想起しようとするのも、韓国政治の同時代経験を有する世代の在り方と関係しているだろう。また、原著出版の2002年は、韓国でベトナム戦争をめぐる記憶が鋭く対立した時期である。書名の「記憶の戦争」は、「自由の十字軍」という「権力が作り出した神話」（116ページ）としての公式の歴史と「韓国軍民間人虐殺」という加害の対抗的記憶の間の対立を象徴する比喩となっている。

本書は学術書ではなく、一人称語りの証言と省察の記録であるが、韓国のベトナム戦争における集合的記憶をめぐる政治社会の亀裂や、「もうひとつの記憶」の諸アクターの政治行動について考察する上で重要な文献と思われる。なお、翻訳者は、日本語でも読める多数の関連文献や原著出版以降の韓国の動向を訳注で詳しく紹介している。

（金栄鎬 広島市立大学）